

420 ページ中 100 ページまで。B5 に近い大きさと分厚さで持ち運びしにくい、電車読書しにくい。中身はそれなりに面白い。次回、また読む。

ところで話のついでに聞くのですが、日本の歴史の基幹道路の東海道のことを、東海道五十三次といいますね。なぜ五十三次になっているか、わかりますか？ これも華嚴世界と関係があるんです

華嚴世界観は『華嚴経』にもとづいています。その『華嚴経』の入法界品(にゅうほうかいぼん)という一章に善財童子(ぜんざいどうじ)という求道者が出てくる。善財童子が観音や弥勒などの、数十人の善知識(ぜんちしき(覚老))をネットワーク的に訪ねて旅をするという構成なんです。そして最後に普賢(ふげん)菩薩のところにたどりついて大望をはたす。その童子がたずねた善知識の人数が、実は五十三人なのです。それで五十三次にした(図 05)。どうやら、徳川幕府に華嚴世界の童子の旅を東海道にあてほめたプランナーがいたようですね。

ここに「いやよして」という文字が連続して並んでいるとします。この文章はどこで句読点を打つかによって意味が変わります。どのように句読点を打ちますか。人によりますが、ふつうは「いや、よして」と句読点を打つ。これがふつうの平均人です。しかし、これを「いやよ、して」(笑)というふうに句読点を打つこともできる。そういう人も少なくはない(笑)。どっちが心理をついているかは、まあ、別にして、このように句読点は意味の正負をさえ変えることがあるのです。

#### パララックス (平行視)

農耕とは、情報文化史的には人工的な生産空間開発の開始を意味します。ヒプシサーマルの進行で、それまで自生していた小麦がとれなくなると、「あの小麦よ、もう一度というわけで農耕がはじまるわけです。そこにはヒプシサーマル以前の“小麦による生活”という情報文化モデルが生きていたということなんです。この小麦農耕とともに、西アジアや中国に彩陶土器が出現する。これは日本で縄文土器が普及した時期にあたります。

それにしても小麦をパンにして食べられるようにするのは、そんなにかんたんではありません。縄文ではドングリなどが主食ですが、これを粉にしてダンゴ状にして動物油で揚げるというのも、けっこうたいへんである。つまり人工的に素材を変化させなければならない。こうした状況のなかでは、土器はそうした変化を可能にする“魔法のウツワ”だったわけです。それで土器を所有する集団は、そのウツワにそのパワーを象徴する形状や文様をつけた。すごい文様やすごいフォルムをもった集団は、それなりの生活するパワーをもっていたわけです。もうひとつ、ヒプシサーマルなどの気候変化にあわせて着るものも変化するのですが、そこにもパワーをこめた文様が出現していきます。

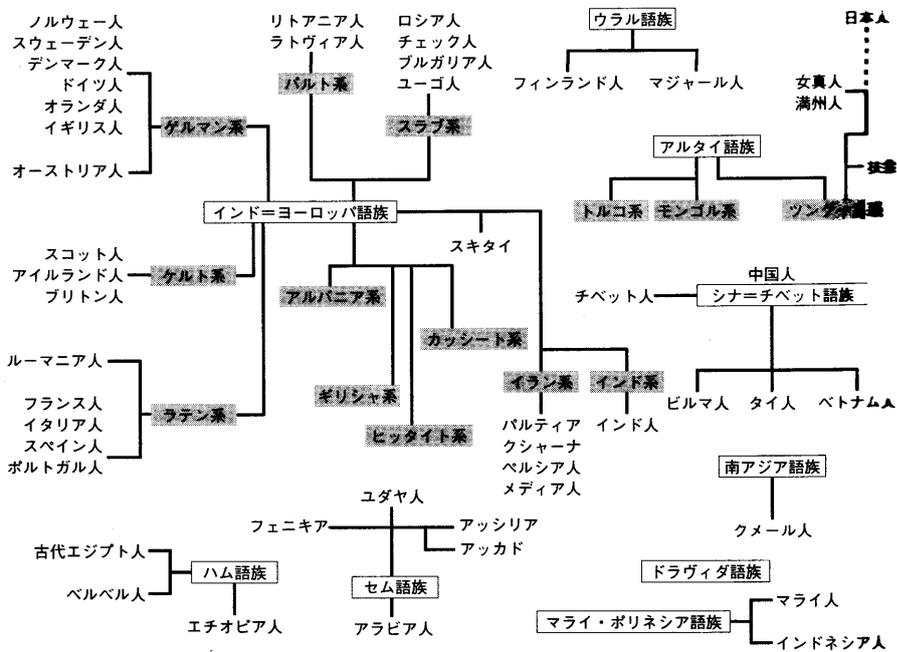
こうした背景のもと、土器は収穫物を入れておいたり、煮炊きをしたり、定住生活が進むた

めの水などの必需品を溜めておく重要な道具になってきます。

そうすると、土器そのものが一族のアイデンティティをあらわすシンボルになり、いわゆる「威信財」としての力をもちはじめるのです。

アッカド語も、やはり子音文字だけの音節文字です。そして、そのアッカド語で、世界最古の偉大な叙事詩といわれている『ギルガメシュ』という長編が編集される。テレビ東京の深夜番組のことじゃないですよ（笑）。『ギルガメシュ』は、ギルガメシュという英雄が怪力のエソキドゥと協力してフンババという森の怪物を倒して友人になるという、なかなか感動的な物語です。ノアの洪水の話も入っています。『聖書』はここからずいぶん話を盗作していますね。『ギルガメシュ』が編集されたのは紀元前二三〇〇年くらいです。そういう物語がアッカド語で綴られた。ですから、アッカド語は物語を最初に記述した言語なんです。

語族から見ると、日本と中国は異なる。



**レジュメ 8 世界の語族** カ、アメリカ大陸と、それぞれ  
西アジアからヨーロッパ、南の情報文化を支える言語の  
アジア、東アジア、アフリ系譜が見えてくる。